

静岡文化芸術大学 文化芸術セミナー

浜松 楽器の事典

ピアノ編 第1章

2014年6月6日（金）

開場 17時50分 開講 18時20分

静岡文化芸術大学講堂

浜松 楽器の事典 ピアノ編 第1章

《第1部》 楽器トーク 《テーマ 浜松のピアノ産業》

コメンテーター 四方田 雅史（文化政策学部 文化政策学科 准教授）

報 告 富田 晋司（地域連携室）

《第2部》 名曲ライブラリー ピアノ／石井 園子

D・スカルラッティ（1685～1757）

ソナタ ホ長調 K.380 L.23

ソナタ ヘ短調 K.466 L.118

J・S・バッハ（1685～1750）

平均律クラヴィーア曲集 第1巻 第1番 ハ長調 BWV846

J・ハイドン（1732～1809）

ソナタ第33番 ハ短調 Hob.XVI:20 Op.30-6 より第1章

ソナタ第48番 ハ長調 Hob.XVI:35 Op.30-1 より第1章

W・A・モーツァルト（1756～1791）

ソナタ第11番 イ長調 K.331 《トルコ行進曲付》より第1・3楽章

第1楽章 Andante grazioso

第3楽章 Alla Turca; Allegretto

L・V・ベートーヴェン（1770～1827）

ソナタ第8番 ハ短調 Op.13 《悲愴》

第1楽章 Grave - Allegro di molto e con brio

第2楽章 Adagio cantabile

第3楽章 Rondo; Allegro

《プロフィール》

石井 園子 (ISHII Sonoko) ピアノ

浜松市出身。5歳よりピアノを始める。

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校、東京藝術大学を経て、同大学大学院修士課程修了。

学部卒業時に同声会賞受賞、併せて宮中桃華楽堂における御前演奏者に選ばれる。大学院修了時に修了演奏優秀者による 安川記念ジョイントリサイタル Vol.24 (東京・浜離宮朝日ホール) に出演。平成21年度文化庁新進芸術家海外研修員として渡独。国際アントン・ルービンシュタイン音楽院 Meisterklasse 修了。小学3年生で第1回ウィーン音楽コンクールインジャパン小学校の部第1位、及びオーストリア文部大臣賞、シュベルトの演奏に贈られる中部日本放送賞受賞。他、国内の学生コンクールにて上位入賞。

第31回フィナーレ・リーグレ国際コンクール(伊)第1位、及びパルマ・ドーロ賞受賞。第78回日本音楽コンクール第3位。第1回パウル・バドゥラ＝スコダ国際ピアノコンクール(スペイン)第2位。第22回リナ・サラ・ガロ 国際ピアノコンクール(伊・モンツァ)第3位。

これまでに藝大フィルハーモニア、浜松交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、“パウル・コンスタンティネスク” フィルハーモニックオーケストラ、ミラノ・ジュゼッペ・ヴェルディ交響楽団等と共演。

近年浜松においては、2008年浜松市文化振興財団主催 第3回はましんファミリーコンサート、2011年浜松市制100周年記念 浜名梱包クラ シックススペシャル“アクト・ニューアーティスト・シリーズ”、2012年浜松音楽友の会主催 四季のコンサート浜松出身の演奏家シリーズ等に出演。

これまでに梶山知子、疋田範子、宮本久美子、大野真嗣、角野裕、ディーナ・ヨッフエの各氏に師事。

日本・ドイツでのソロリサイタルをはじめ、デュオ、室内楽にて演奏活動を行う傍ら、後進の指導にもあたっている。

東京藝術大学音楽学部 及び 名古屋音楽大学 非常勤講師。

石井園子オフィシャルサイト <http://www.sonokoishii.com>

四方田 雅史 (YOMODA Masafumi) / コメンテーター

文化政策学部准教授(文化政策学科)

専門は経済史、産業史、経営史

富田 晋司 (TOMITA Shinji) / エディター(編集者)・報告者

地域連携室所属 文化・芸術研究センターの事業等を担当

<資料>

浜松のピアノ産業～創成・発展・飛躍・成熟

世界のピアノ産業の変遷（「浜松」以前のピアノ製造）

- ピアノが生まれたのはイタリア（バルトロメオ・クリストフォリ／フィレンツェ・メディチ家楽器工房主任、1709、「クラヴィチェンバロ・コン・ピアノ・エ・フォルテ」）、ピアノ作りの発展期は19世紀、ピアノ製造の発展はイギリス、フランス、ドイツ＝オーストリア、アメリカなど。
- 主なピアノ製作者：ブロードウッド（英・1770）、エラール（仏・1777）、グラーフ（オーストリア・1804）、プレイエル（仏、1807）、ベーゼンドルファー（オーストリア・1828）、ブリュートナー（独・1853）、ベヒシュタイン（独・1853）、スタインウェイ（米・1853）

1. 山葉寅楠による楽器製造業の創業

- 和歌山出身の山葉が浜松滞在中に小学校のオルガンを修理、その後自ら試作し（1887）、試作品を東京の音楽取調掛に持ち込み試奏（1887）、その後改良を重ね、やがてオルガン製造所の設立へ（山葉風琴製造所・1889、現・浜松中区菅原町）

2. 河合小市の貢献、山葉の渡米、国産ピアノの製造、ピアノ製造業の発展

- 河合小市、山葉のオルガン工場入り（1896）、オルガン性能の向上に貢献、その後ピアノアクションの研究開発
- 日本楽器製造（株）設立（1897）、山葉寅楠渡米（文部省囑託・1899）
- 国産ピアノ（アップライト）の製造（1900）、国産初のグランド・ピアノ完成（1902）、第5回国産勸業博覧会で最高賞（1902）、セントルイス万国大博覧会で名誉大賞（1904）、その後国内から注文相次ぐ（特に学校関係）、ベヒシュタイン社から技師・エール・シュレーゲル氏招聘（1926）

3. 大争議と経営の刷新～経営の近代化と技術者たちのスピンアウト

- 大規模な労働争議（105日間、1926）、経営状態悪化、住友から川上嘉市が社長に就任、経営の近代化を推進
- 主要技術者のスピンアウト（河合小市、山葉直吉、大橋幡岩）、河合楽器研究所設立（1927）

4. 経営者の時代と中小ピアノメーカーの勃興～高度経済成長と量産体制の確立

- 第2次世界大戦後、新しい経営者が登場、ヤマハ：川上源一（1950）、カワイ：河合滋（1955）、
- 市場の拡大と量産体制
音楽教室（ヤマハ 1954、カワイ 1956）予約制度（カワイ 1960、ヤマハ 1963）、1950年代後半から大規模工場の建設・稼働続く（ヤマハ：西山、掛川、カワイ：新居、舞阪）
- 中小ピアノ製造者も増加（1957、36事業者）、大橋ピアノ研究所設立（1958）

5. ピアノ産業の成熟～ピークアウトから現在まで

- 日本のピアノ生産のピークは1980年（年産約380千台）、現在ではピークの10%程度までダウン（2013年は35千台弱）
- 1980頃から中小製造業者の倒産、廃業が相次ぐ 現在では浜松における中小製造業者による新品ピアノの製造はほとんど行われていない

産業集積としての浜松ピアノ産業

四方田 雅史（文化政策学部准教授）

産業はある地域に集まる傾向があります。そのことを産業集積と言います。浜松周辺は楽器産業が集中する地域であり、主な企業だけでも大量生産を担ってきたヤマハやカワイ、ローランドがあります。それにくわえ、高級品市場やニッチ市場をねらう中小楽器生産者、フレームやアクションなど部品の生産を担う工場や木材・金属加工、塗装や調律などの関連業もかつて集まっていました。たとえば大阪市で創業したローランドも、扱うのは電子楽器であったにもかかわらず、浜松の「進取の気性」やピアノ生産に必要な木材加工や塗装の高い技術を理由に浜松に移ることにしたと、創業者の梯郁太郎氏は回想しています。この例が示すように、浜松に楽器関連企業が多くありそれを支える職人たちも多いことが、他の楽器関連企業をも引きつける結果になったことが窺えます。

このように産業が産業を引きつける現象はどこでも見られますが、その産業を生み出す最初のきっかけを見出すにはやはり歴史を見る必要があります。なぜなら、ある事件がきっかけになって産業集積の循環が作用しだすからです。在来産業が近代化に対応しながら発展した産地は、江戸時代までの産地形成がさらなる集積を生んだ例が多いと言えます。このたび世界文化遺産になる富岡製糸場も、養蚕が盛んな群馬県に政府が注目し官営工場を設立することでさらなる発展を遂げました。愛知も磁器生産が盛んでしたが、近代化の過程でノリタケの高級磁器、碍子や衛生陶器へと製品を多様化させていきました（これらの“究極の”きっかけは江戸時代にまで遡らなければならないわけですが）。完全に西洋伝来の産業では江戸時代からの蓄積がないことが多いため、幕末や明治時代のきっかけが重要です。鉄鋼関連業はたとえば八幡（現北九州市）周辺に集積していますが、そのきっかけは政府が漁村を官営工場の場所として選択したことでした。政府の決断が産業集積のきっかけになったと言えます。他方、浜松の洋楽器の場合、純粋に民間主導で発展したため、当時は些細な偶然がより働いたと言えます。浜松出身ではない山葉寅楠が医療機器修理のために浜松に移り、ここでたまたまオルガン修理を依頼されなければ、楽器産業は集積したでしょうか。浜松に木材加工技術があったとか、「やらまいか精神」があったとか、いろいろ集積の必要条件を挙げることはできますが、どれも他地域でも成り立つ条件であり、やはり上記の偶然も重要であったことは否めません。いずれにせよ、山葉が商機を見出すという些細なきっかけで日本楽器（現ヤマハ）ができると、彼に魅かれ職人が集まり、労働争議などを契機にスピン・アウトしていきながら、多様な楽器関連業者を集積させてきたのです。日本楽器 1 社だけでしたら、それが倒産・撤退すればその集積は脆くも崩れてしまいましたが、こうして生まれてきた多様な企業群が切磋琢磨しながら集積の循環が強められていった過程を、歴史から描くことができます。日本楽器はさらにバイクなどにも進出した結果、楽器以外の多様な産業を集積させる契機にもなりました。このように集積する産業が多様になり重層化することで産業を引きつける力も強まりますが、この好循環を最初に起動させるきっかけは、以上のように些細な出来事でもいいわけです。気象では「バタフライ効果」—ブラジルで蝶が羽ばたくと日本で嵐が来るような現象—が起こり得るそうです。些細な偶然が回りまわって産業集積を生み出すプロセスもこの現象と共通しています。

浜松の楽器産業でも他の産業でも、現在アジアとの競争や市場の飽和に直面して、中小の工場や関連業者が撤退し、浜松にもともとあった産業内の重層性、産業間の多様性が弱まっているように見えます。その再生を考える上でも浜松の楽器産業集積の歴史から、それが培ってきた特徴を認識しなおす必要もあるのではないのでしょうか。